

当院において分離同定された *Klebsiella variicola* と *Klebsiella pneumoniae* の比較検討

◎浅井 千春¹⁾、榊原 亮子¹⁾、根橋 遥平¹⁾、山本 将健¹⁾、中川 理捺¹⁾
社会医療法人 宏潤会 大同病院¹⁾

【はじめに】

Klebsiella variicola は、*Klebsiella pneumoniae* complex に属し 2004 年に新種として提唱された。生化学的性状の類似性から *K.pneumoniae* として誤同定されてきたが、MALDI-TOF MS により同定可能となった。当院では 2022 年 4 月より MALDI バイオタイパー sirius one (ライブラリー Ver.9) を導入し、*K.variicola* が検出できるようになった。そこで *K.variicola* が *K.pneumoniae* と違いがあるか比較検討した。

【対象及び方法】

2022 年 4 月～2023 年 6 月に提出された臨床材料 26,722 件から MALDI-TOF MS で同定された *K.pneumoniae* と *K.variicola* について、材料別検出率及び ESBL (extended-spectrum β -lactamase) 産生率を比較した。

【結果】

K.pneumoniae 500 株の材料別検出率を高い順に示す。泌尿生殖器系材料は 40% (200 株) で、内訳は尿 37.8% (189 株)、膣分泌物 1.6% (8 株)、外陰部 0.4% (2 株)、亀頭部 0.2% (1 株) であった。呼吸器系材料は 32.6% (163 株) で、内訳は喀痰・気管支吸引物 31% (155 株)、鼻腔 0.8% (4 株)、鼻汁 0.6% (3 株)、口腔内 0.2% (1 株) であった。血液穿刺液系材料は 21.4% (107 株) で、内訳は血液 21.0% (105 株)、胸水 0.2% (1 株)、腹水 0.2% (1 株) であった。消化器系材料は 3% (15 株) で、内訳は胆汁 2.2% (11 株)、大腸粘膜 0.6% (3 株)、その他 0.2% (1 株) であった。上記以外の材料は開放膿 1.0% (5 株)、皮膚 0.8% (4 株)、非開放膿 0.6% (3 株)、肛門周囲膿瘍 0.2% (1 株)、ドレーン 0.2% (1 株) カテーテル 0.2% (1 株) であった。

K.variicola 91 株の材料別検出率を高い順に示す。泌尿生殖器系材料は 41.8% (38 株) で、内訳は尿 31.9% (29 株)、膣分泌物 9.9% (9 株) であった。呼吸器系材料は 35.2% (32 株) で、内訳は喀痰 30.8% (28 株)、鼻腔 4.4% (4 株) であった。血液穿刺液系材料は血液 17.6% (16 株) であった。消化器系材料は胆汁 2.2% (2 株) であった。上記以外の材料は、皮膚 2.2% (2 株)、耳漏 1.1% (1 株) であった。

ESBL 産生率は、*K.pneumoniae* は 15% (75/500 株) であった。材料別にみると尿 38.7% (29 株)、喀痰・気管支吸引物 32.0% (24 株)、血液 16% (12 株)、開放膿 2.7% (2 株)、非開放膿 2.7% (2 株)、皮膚 2.7% (2 株)、胆汁 1.3% (1 株)、カテーテル 1.3% (1 株)、腹水 1.3% (1 株) 亀頭部 1.3% (1 株) であった。*K.variicola* は腎尿より分離された 1 株のみで 1.1% (1/91 株) であった。

【結語】

今回の検討では、*K.pneumoniae* と *K.variicola* の材料別検出率には差が見られなかった。

ESBL 産生率は、*K.pneumoniae* 15% に対し *K.variicola* 1.1% であり、現状では *K.variicola* であれば ESBL 産生菌の可能性は低いと考えられる。しかしながら *K.variicola* が *K.pneumoniae* と誤同定されたとすると、*K.pneumoniae* の ESBL 産生率は 15% から 12.9% となり過少評価されることになる。

連絡先：052-611-6261 (内線 4524)